

題目 関係流動性が成功状況での感情の文化差を生むメカニズム —感情の機能的側面からの検討—

氏名 前田 友吾

指導教員 結城 雅樹

本研究の目的は、成功状況で見られる誇り・羞恥感情経験の文化差の要因を探ることである。本研究では、社会生態学的要因として関係流動性に注目し、関係流動性が成功状況での自己意識的感情の文化差を生むメカニズムを検討した。

人は達成や成功時に、ポジティブな自己意識的感情である誇りを経験する。その一方で、同様に達成や成功した状況であってもネガティブな自己意識的感情である羞恥を経験することがある。このような成功状況における感情経験の違いを生む要因はなんだろうか。

成功状況での感情経験の違いを生む要因として、文化の影響が示唆されている。Lewisら(2010)は、日本人はアメリカ人と比べ課題の成功時により羞恥を表出する一方、アメリカ人は日本人と比べ誇りを表出するという結果が得られた (Lewis et al., 2010)。また、Stoeberら(2013)では、成功時の誇りは日本と比べ英国において高く、一方で成功時の羞恥は英国と比べ日本において高かった。しかし、これらの研究では文化差を生む社会環境要因について、具体的な検討はなされていない。そこで本研究では、社会生態学的観点から関係流動性と感情の機能的側面に着目し、成功状況での感情経験の文化差の説明を試みた。

関係流動性とは、当該社会環境での対人関係選択の自由度のことである (Yuki & Schug, 2012)。北米に代表される高関係流動性社会の主要な適応課題は、望ましい対人関係の獲得と維持である。そのための一つの方法は、自己の社会的価値の向上と宣伝である。一方、低関係流動性社会の主要な適応課題は、対人関係からの排除の回避である。そのため、人々は他者との衝突や競争を避ける。こうした異なる適応課題の下では、成功時に経験すべき感情が異なってくるだろう。誇りには、成功経験を追求させると同時に、自身の社会的価値を他者にアピールする機能がある (Tracy et al., 2010)。これは、自己の社会的価値の向上と宣伝が主要な適応課題である高関係流動性社会でより適応的だろう。一方羞恥には、自らの行為の再発を防止すると同時に、行為の無意図性を他者に対してアピールする機能がある (Hariss, 2006)。これを成功時に経験することで過度の成功を抑制し、成功の無意図性を表明することは、他者との競争の回避が主要な適応課題である低関係流動性社会でより適応的だろう。

以上の仮説を検討した前田・結城(2019)では、予測通り、高関係流動性状況に置かれた人ほど、成功状況で誇りを経験しやすく、低関係流動性状況に置かれた人ほど成功状況で羞恥を経験しやすいことを見出した。だが、この研究の限界は、関係流動性の高低が、本当に

各感情の適応価の違いを導いているかを直接検討していないことであった。そこで本研究では、研究1において成功者の感情表出に対する知覚者側の反応に注目し、成功時に誇りもしくは羞恥が表出されることが、関係流動性の異なる社会で評判の違いをもたらすという、シグナリング機能仮説を検討し、研究2において、成功者の感情経験により動機づけられる行動に注目し、成功時に経験する感情が、成功の獲得または回避を動機づけるという感情の動機づけ機能仮説を、質問紙を用いた日米比較調査により検討した。

研究1では、予測通り、誇り表出者では日本人よりもアメリカ人で評価が高かった一方で、羞恥表出者への評価は予測と反してアメリカ人よりも日本人において高かった。また、関係流動性と誇り表出者および羞恥表出者への評価はいずれも正の相関があった。これは、仮説を支持しない結果であった。研究2では、誇り・羞恥経験は先行研究と同様の結果が得られた。また、媒介分析の結果、誇り・羞恥の両感情を媒介変数とした間接効果が有意であった。つまり、関係流動性が高いほど誇り感情は高く、誇り感情が高いほど促進焦点も高かった。また、関係流動性が低いほど羞恥経験は高く、羞恥経験が高いほど促進焦点が低かった。これは仮説を支持する結果であった。しかし、全体のサンプルでの分析では仮説を支持する結果が得られた一方で、日米の国別の分析ではこの結果は再現されず、日本においては誇り・羞恥経験に対する関係流動性の効果は有意でなかった。

以上の結果から、研究1のシグナリング仮説では仮説は支持されず、研究2の動機づけ仮説では、全体のサンプルでは仮説が支持されたものの、日本人のみでは仮説が支持されなかった。残された課題として、質問紙調査のみならず実験室実験による知見の検討、本研究では支持されなかったシグナリング仮説の再検討と、日本における成功状況での感情経験を左右する異なる要因の検討を行う必要がある。本研究の結果は仮説の積極的な支持はなされなかったものの、社会生態学的観点から感情の機能的側面に注目し、社会環境に対する適応として感情を捉え、文化差を生むメカニズムについて検討したという点で意義がある。